

## 40 【ぶちかまし】

町に大相撲が来るというので、母親に連れられて出かけたことがありました。

ぼくの大好きな、千代の山と吉葉山が来る。

めんこの絵でしか、知らない力士ではあったけれども。

母親の大好きな、栃錦と若乃花も来る。

(この力士は、むろん初代の若乃花です)

母親は以前働いていた割烹(かっぽう)で、若乃花の若い頃をみたことがあるらしい。

ほんものの若乃花だったかは、自信がないようだけれども。

そのときにもらったという手形(てがた)を、押し入れから引っぱりだしました。

「こらあ、おにのてがたじゃ、にんげんじゃあねえ」

わしがいうと、母親は、

「土俵の鬼、いうんじゃ」

と胸をはりました。

町の広場に行くと、たくさんの力士たちが四股を踏んだり、立ち合いの稽古をしたりしていました。

母親とぼくは木陰の席を陣取りました。

広場の真ん中に土俵が作られていて、力士たちの取り組みはすぐに始まりました。

前頭二十枚目からなので、千代の山や吉葉山が出てくるまで二時間近くかかりそうでした。

そのうちぼくは居眠りをしてしまい、母親に揺り動かされたときは、すでに横綱の取り組みが始まっていました。

栃錦と、[土俵の鬼]若乃花の相撲は終わっていて、両力士共見事に勝っていたとのことで、母親は上機嫌で、めずらしく口が軽かったものです。

まず横綱吉葉山が、土俵にあがります。

相手は名前も知らない幕内の力士で、呼び出しの声では、

「ぶちかまし～ぶちかまし～」

ときこえました。

とにかく色が黒い。

炭団（たどん）のおばけか、黒い雪だるまを連想しました。

行司が待ったなしの掛け声をかける。

両国の土俵でやるときは、三分とか四分とかかけるのだが、地方巡業ではすぐに試合が始まる。

そんな母親の解説どおり、両力士が立ち上がりました。

すると、瞬きするかしないかの間に、吉葉山は土俵下に吹っ飛んでしまっていたのです。

地方巡業では、よほどのことがない限り横綱が勝つようになっています。

そんな母親の解説を裏切るこの結果。

するとどういふわけか、続いて土俵にあがった横綱千代の山の相手も「ぶちかまし～ぶちかまし～」

でした。

勝ち抜き戦ではないから、一人の力士が二度まで土俵にあがることはない。

そんな母親の解説は、またしても裏切られました。

しかも今度は千代の山が、炭団のおばけか黒い雪だるまかわからない、ただ黒くて大きくて丸いだけで、何の魅力もない力士に突き飛ばされたのです。

ぼくは鼻根の吉葉山と千代の山が簡単にやられたので、不満不快不機嫌で帰ってきました。

しぶしぶ懐爺に、大相撲の報告に行くと、

「やっぱり【ぶちかまし】が出ましたか」

なぜか苦笑しています。

「金ちゃんが千代の山と吉葉山が好きなのを嫉妬して、突如登場した相撲取りのおばけですよ」

「なんじゃと。おばけはどひょうにもでるんか」

ぼくは愕然（がくぜん）としました。

顎（あご）がはずれそうになりました。

「【ぶちかまし】の、あのとくいわぎは、なんじゃ」

「あれを、ぶちかましっていうんですよ。相撲四十八手にあります」

「なんとかならんのか。はたきこむとか、うっちゃるとか」

「【ぶちかまし】は卑怯(ひきょう)なおぼけです。横綱は地方巡業では、はたきこみとかうっちゃりとかはやらないのです。そういうのは姑息(こそく)な勝ち方で、横綱の沽券(こけん)にかかわるのです。それを知っているもんだから、ぶちかましをやるんです」

懐爺はやたらと、難しい言葉を並べました。

卑怯とか姑息とか沽券とか。

その難しい言葉のおかげで、何となく千代の山と吉葉山が正義の力士で、【ぶちかまし】は悪役力士の感想を持ちました。

それでも不満不快不機嫌はほとんどなおらなかったのです。

「【ぶちかまし】なんかにまけるたあ、くやしいのう」

正義の力士には勝ってほしい。

鞍馬天狗が勝つと同じく。

「金ちゃん、人生、負けるが勝ち、ということもあります。それを教えてくれるのも、おそらく【ぶちかまし】の役目なんでしょう」

「じんせいはいまけても、すもうはまけてほしくないのう」

ぼくは意地を張ったのではありません。

千代の山と吉葉山の黒星の、衝撃(しょうげき)が大きすぎたのでした。